

黒潮が創り出す 海のフォトスタジオ

ocean+α

©ocean+α ウェブマガジンの二次配  
付および画像・文章の複製、二次使  
用を禁じます

# KUSHIMOTO

水中カメラマン・中村卓哉、初潜入!

大型の台風21号が迫り来る中、  
取材班は本州最南端の海、  
串本へと向かった。

「海のフォトスタジオ」

今回が初串本となる

水中カメラマン・中村卓哉は

この海をそう称する。

温帯と亜熱帯が混ざり合う、

異色の海の魅力を紹介しよう。

串本町

「浅地」の北側の壁一面で満開になるオレンジ色のホリブ



取材1本目でやってきたのは、外海で一番の人気ポイント「浅地」。串本ダイビング事業組合が使用しているポイントは全部で22カ所。そのほとんどがボートポイント（ビーチは3カ所）だ。メインとなる西側のポイントは外海と内海に分かれている（P08参照）。ダイナミックな地形や群れ、大物を狙うなら外海のポイントで、中でも一番人気があるのが「浅地」だ。

## これぞ黒潮の恩恵。生命ひしめく海

「浅地」がダイバーを魅了する理由は、「潜るとすごいことが待っている」的な、“浅地神話”なるものが広まったことにあると、ガイド陣は口をそろえる。

大物狙いのギャンブルダイビングが可能で、その成功体験にハマってしまうのが、神話を生んだゆえんかもしれない。マダラトビエイやハンマーヘッドシャーク、極希にマンタも登場するという。今回取材班は、台風で海況が悪化しているにも関わらず、「浅地」に2日間連続でエントリーでき、マダラトビエイに3度も遭遇した。

また、“THE串本”が見られるのもこのポイントだ。串本は温帯と亜熱帯の融合のような海で、ハードコーラルとソフトコーラルが仲良く並んでいる。これは伊豆や沖縄では見られない、目を疑うような光景だ。

さらに、日本では約4000種類の魚が観察できるといわれているが、串本ではそのうちの1300種類の魚（沖縄で見られる魚の7割、伊豆半島近海で見られる魚の3割）が観察できる。そんな“THE串本”の海景が「浅地」の海には凝縮されている。

これらの特異な海景の背景には、黒潮の存在がある。フィリピン沖を源として日本の南岸に沿って流れ、潮岬にその潮が当たることで枯木灘南部では特別に暖かい環境となり、亜熱帯の生物が観察できるのだ。

串本はまさに生物のるつぼと言えるのかも知れない。

串本では何個体ものアザハタを間近で見ることができる。フォト派はぜひ写真に収めたいシーンだ



## 串本の3大アイドルに大接近!

次に向かったのは内海のポイント「備前」。

穏やかで多種多様な生物が見られる内海は、ビギナーはもちろん、フォト派からも支持されている。

ここで会えるのが串本の3大アイドルたち。“癒しのアオウミガメ、驚きのイラ、賢いアザハタ”の三拍子といった感じだろうか。

アオウミガメはまだほんの子どもで、仕草も幼くてかわいい。こちらを警戒するというよりは、人に興味津々で顔を覗き込んできたりする。

イラは、手や落ちていた石などを目の前で振ると興味を示して近づいてくる。目がキョロキョロと動き、どこを見、



03

何を考えているのかを何となく感じ取ることができておもしろい。目は口ほどに物を言うといった感じ。

そして、アザハタはなんとも賢い。餌を獲るために、マクロ撮影をしている人や、その周りにいるダイバーを利用し、餌となるキンメドキやイシモチが人から逃げるためにまとまって動くのを狙っている。「人を利用して餌を獲る術」を身につけているのだ。

それぞれにいろいろな特徴を見つけることができるのも、これらの生き物に接近して観察できるからだろう。串本の海では、普段近くで観察できない生物たちに大接近!むしろ、魚の唇が近づすぎて少し怖いくらい(笑)。



01



02

01. 興味を示し近づいてくるイラ。こんなに寄れるのは珍しい 02. ギョロギョロと眼球が動くのでよく観察してみるとおもしろい  
03.1ダイブで数個体のアオウミガメに出会える。指を出して噛まれないように

前が見えなくなるほどのスカシテンジクダイが創り出す造形が圧巻（上） 真っ赤なインパナに隠れるハナミノカサゴ（下）



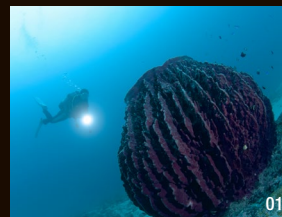
## 雨風にも負けないゴールデンポイントの実力

「ゴールデンポイント」。

魚の種類が豊富で雨風に強い内海のポイントを、串本のガイドはそう呼んでいる。「備前」「住崎」「ガラスワールド」「中黒磯」「アンドの鼻」あたりを呼ぶことが多いが、「アンドの鼻」は冬季期間限定で、毎年いつダイバーに開放されるか定かではないため、開いていたらラッキーな場所だ。

今回も、「台風で他がクローズになってしまったので串本に来た」というゲストに何度も遭遇した。確かに、伊豆でも東伊豆がだめだから西伊豆ということはあるが、「台風だから串本」という選択に、串本の底力を感じる。

初めてゴールデンポイントを潜った中村卓哉カメラマンも、「1ダイブ1時間弱という時間は、串本ではほんの一瞬にさえ感じてしまう。ワイドもマクロも



01



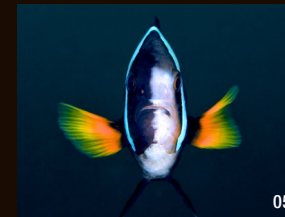
02



03



04



05



06

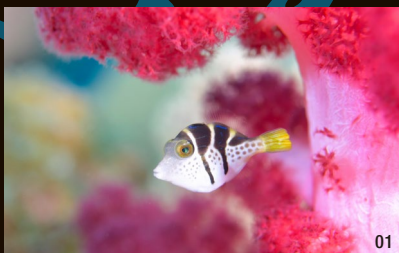
どちらも超一級の被写体がそろっているため、1ダイブでかなり濃密な写真を撮ることができた」と語っていた。

ワイドでは、和歌山や鹿児島がメイン生息地といわれるアカヒメジやカゴカキダイの群れ。マクロでは、体色美しいレンテンヤッコや、顔が縦に2色に分かれている珍しいクマノミなど。さらに、砂地では、ホタテツノハゼやオニハゼ SP3がオスメス同時に出ている、これまた珍しい瞬間に遭遇したりした。

中村カメラマンは、映画「となりのトトロ」でメイちゃんが「どんぐり! どんぐり!」と進むシーンのごとく、「ハゼ! ハナハゼ!」と砂地を進んで行った。

01. 期間限定ポイント「アンドの鼻」名物の大きなミズガメカイメン 02. 串本近海がメイン生息地のカゴカキダイとアカヒメジは「ガラスワールド」で共生 03. 「備前」で出会った石垣模様の背びれがオシャレなホタテツノハゼ 04. オニハゼ SP3メス。「備前」ではオス・メス同時に出ている珍しいシーンに遭遇 05. 顔が2色に分かれているフォトジェニックなクマノミを「住崎」で発見 06. 体色鮮やかなレンテンヤッコ。串本には多く生息するのでぜひ観察したい

## RED



01

## ORANGE



03

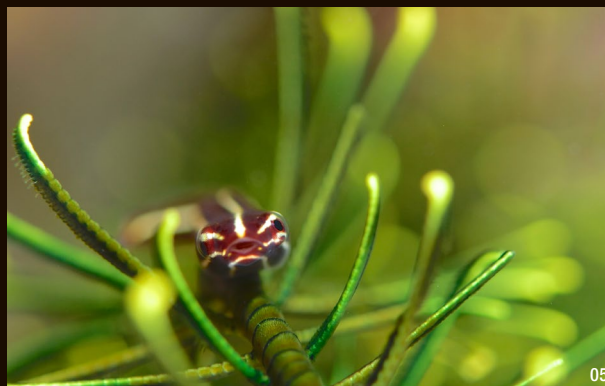


02



04

## GREEN



05



06

## BLUE



07



08



09

01, 大きなウミサカにかけれんぼする小さなノコギリハギ 02, 赤いイソバナに擬態するイソバナガニ 03, オレンジのヤギの暖簾をくぐるように顔を見せたクダゴンベ  
04, 「双島沖2の根」で出会った大きなボンボンがかわいいキンチャクガニ 05, 緑の草原を散歩中のタスジウミシダウバウオ 06, 名前の通りオレンジの線が特徴的なダイダイオオメワラズボ 07, 鏡の向こう側にいる自分を見ているかのような幻想的なソラスズメダイ 08, 沖縄以南に生息することが多いセナキルリスズメダイも串本では見られる 09, 毎年同じ珊瑚に1匹だけで姿を見せるナンヨウハギ

## 中村卓哉が切り取ったカラフルな生物たち

世界中の海を潜る中村カメラマンは、初めての串本を“トップクラス”の海だと断言する。

「小さな生き物に関しても、自分たちが暮らす恵まれた環境を楽しんでいる印象がした。海藻が生える岩場に暮

らすヒトスジギンポ、真っ赤なヤギに迷い込んでしまったアカメハゼ、イソバナの森にひっそりと暮らすアオサハギなど……。日本屈指のフォト派ダイバーが訪れる海ともあって、多様なリクエストにすぐに応えられるだけの生物の豊富さに驚いた」

さらに、トップクラスのガイドがそうした魅力を余すことなく伝えてくれるのだという。

「どのように撮影していったら無駄なく時間を有効に使えるかを、完璧にわかってくれているガイド陣。決して天候に恵まれたわけでもないが、数日串本の海を潜っただけでこれだけのバリ

エーション豊かな写真を撮ることができたのは、海のとガイドの力の双方がトップクラスの海だから。それに尽きと思う」

フォト派を魅了してやまない串本の海には、確固とした理由があるのである。



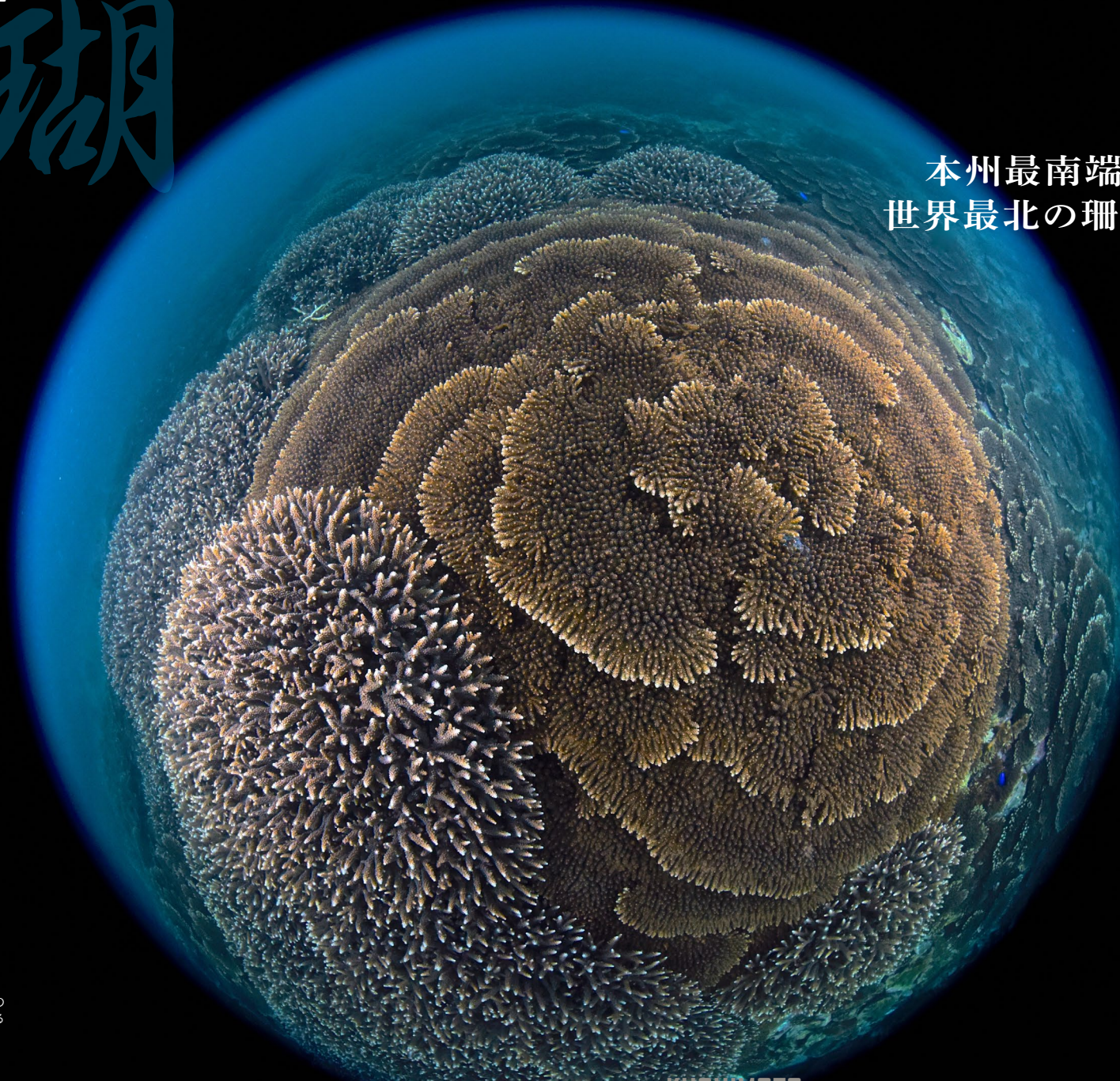
## RG Blue × 串本。中村卓哉の幻想的な世界

ブルーフィルターを使用した、独特の世界観で表現された串本のマクロたち。こんな世界を創り出せるのは、もちろん撮影者の腕もあるが、海もまたそういう撮影に適しているところがある。

重複になるが串本は魚の種類が豊富でフレンドリーだ。なので、時間をかけて撮影できるだけでなく、仮に珍しい生き物であっても1人が1つずつの生物を観察できるだけの「在庫」が豊富なのだ。

気になる撮影方法だが、最近、中村カメラマンが主力機材に追加したものが、RG BlueのSystem03。このブルーフィルターとマイクロソフトライトを駆使して創られたのがこれらの作品だ。仮に普通種であってもまたひと味違って見えて実に興味深い。

01, "イラ抜き"でセボシウミタケハゼの大きさがよりいっそう引き立つ 02, 「住崎」のカエルアンコウもブルーフィルターがかかると妖艶さが増す 03, ミナミシモガニは同じブルーフィルターでも少し不気味だ 04, 「ガラスワールド」にいるジョーフィッシュはまるでステージ上がったパフォーマンスのよう



## 本州最南端で見た 世界最北の珊瑚群生

串本には2005年にラムサール条約  
湿地に登録された、世界最北の珊瑚の  
群生がある。

伊勢エビ網漁の関係で、毎年10/1  
～3/31まで串本のエキジツ時間は  
15:00と決められている

が、例外のポイントもい  
くつかあり、そのひとつ  
がこの珊瑚の群生が見ら  
れる「オレンジハウス前ビーチ」だ。堤  
防から近すぎて、「こんなに近いの？」  
と驚く。水路のような地形を抜けると  
突然、終わりが見えないほどのクシハ  
ダミドリイシに囲まれた。

山と海のつながりを大事にする中村  
カメラマンは、こうした環境は、この海  
が健康である証だという。

「山から河川の栄養が豊富に海に注ぎ  
込まれる場所にはクシハダミドリイシ  
の森。その先には黒潮がバンバン当り、  
南方の魚たちやサンゴの卵が運ば  
れてくる。さらに周囲を岬で覆われて  
いるため台風などに強く、黒潮によつ  
て運ばれて来た栄養が溜まりやすい場  
所でもある。そのような恵まれた場所  
だからこそ、生態系が凝縮され、さまざ  
まな生き物が共存できる生物多様性の  
海が形成されている。この珊瑚群生を  
見て、この海が健康である条件のすべ  
てがここに現れていると確信した」

これらの珊瑚や生態系を、未来永劫  
これからの子どもたちのために守って  
いくのも、ダイバーのひとつの使命。串  
本の海は言葉では語らずしも、大切な  
ことを改めて教えてくれた。

「オレンジハウス前ビーチ」に広がる珊瑚の  
群生。潮位によっては珊瑚が水面近くなる  
のでフィンで珊瑚を蹴ってしまわないように



串本には全部で22のダイビングショップがある(2017年10月現在)が、そのすべてが串本ダイビング事業組合に加盟。みんなで協力して、串本の海をPRし、守っていこうとしているのだ。

1本目で外海

に潜りに行った **アットホームな串本へ、いざ!**

ガイドに、2本

目以降でエントリーしようとしているガイドから「外、ど〜お〜?」なんて電話がかかってくることはしばしば。こんなちょっとした横のつながりから、関西気質もあって(笑)、アットホームな印象を受けた。

今回初めて潜った串本の海をひとことで表すと“フォトスタジオ”だと中村カメラマンは言う。

「潮岬を挟んで、温帯の熊野灘と熱帯の枯木灘の海水が交わる場所に数十カ所のダイビングポイントが集まり、その両方の生態系がうまくミックスされた串本の海は、まさに海の“フォトスタ

ジオ”。被写体の背景のバリエーションも豊富で、珊瑚やソフトコーラル、ヤギやカイメン、海藻やウミシダなど、色とりどりの環境が無数に用意されているのは、まるでスタジオセットのようだった」

さらに、今回は天候に恵まれたわけではないので、今回は太陽の光が差し込んでいるときに串本の海を、特に珊

瑚を撮影してみたいとしきりに語っていたのが印象的だった。

東京からだだと車で約8時間。「週末に気軽にレッツゴー!」と言える距離ではないものの、串本が関西ダイバーのメッカになるのはとてもうなずける。伊豆のダイバーにも、また、ほかの地域のダイバーにもぜひ見て感じてもらいたい。

